風が唄う伝説

Prologue

どこかで、誰かが竪琴を弾いていた。
遠く、遙かな記憶を紡いで、物憂げに、哀しげに。
それはまるで、シルスマリアの森を吹き過ぎてゆく風の溜息にも似て。
その音を誰が初めに紡いだのか、まるで何も知らないままに。

「パパ。どうしたの？」

小さな娘が、その小さな手をひいた。父親の大きな、逞しい手を握りしめて。
彼は微笑んだ――――彼の娘をその腕に抱き上げて。
何でもない、と。

何故、こんなにも胸が痛いのだろう。
幸せだと言っていたのに。

本当に幸せそうに、微笑っていたのに。
艶やかな音色。でも、彼の知っている音はそれではない。もっと澄みきった、光の糸のような優しい音で、かつてこの曲を弾いていた人がいた。
忘れまいと記憶を呼び覚ますほど、その面影は淡い霞の中に消えてゆく。
ただ残るのは、風の溜息を結晶させたような、その旋律だけ。

『だから、約束して欲しい。ミロも必ず、幸せになるって・・・・』

あのひとに、見て欲しい。
この腕の中の幸せを。
自分は、約束を守ったのだ、と。

『酷いじゃないか・・・一方的に約束させておいて、様子を見にも来ないのかい？』

I　復活祭

「風の精がお通りになる！風の精がお通りだぞ！」

遠く、オークの森の峠を越えて、若者が一人走ってくる。彼はその手に、森で一番大きな木から切り出したたいまつを掲げている。谷の人々は皆街道に花を撒き、復活祭の日、南からの風と共に戻ってくる夫や息子たちを待ち受ける。

峠の向こうに、ぽつり、ぽつりと旅人たちの姿が現れ始める。歓声があがり、やがて、それがどよめきに変わる。

旅人たちの、疲れ果てた姿。傷を負っている者も少なくない。

何よりも、昨秋旅立っていった者たちの半数ほどもいないというのは、どういうことなのか。

慌ただしく、神殿に使いが走る。この一年間、谷の医者をも務めていた神官が呼ばれ、女たちは薬や布を取りに家へと走る。

一番に谷へと辿り着いたのは、兵役を終えて戻ってきた谷の長の息子、アイオロスだった。

彼は傷ついた足を手当しようとする女たちの手を丁重に断り、一息に告げた。

東の太陽帝国、ドリアが攻めてきた。

とうとう、戦争が始まったのだ、と。

神殿の窓から、竪琴を奏でる音がこぼれている。

近頃、こんな風に穏やかな風が回廊を通り過ぎる日には、決まって聞こえてくる優しい音。

誰が書いた、何という名前の曲なのか、誰も知らなかった。奏でている赤い髪の少年でさえ、わからなかったのだから。

曲はいつも、突然とぎれる。少年が、その先の旋律を

知らなかったので。
「カミュ、それ、誰も続き知らないんだ？」
　柱にもたれかかって耳を傾けていたもう一人の少年が、小首を傾げて訊いた。竪琴を奏でていた少年とは対照的な、明るい金色の髪をした少年。
「・・・うん。ごめん。母さんが弾いてたのを覚えただけだから・・・・」
「そんな、謝ることなんてないよ！いや、凄くきれいな曲だからさ・・・続きが聴けたらいいのに、って思っただけなんだ」
金色の少年は、間が悪そうに頭をかいた。自分は何をしているのだろう。・・・彼に、母親のことを思い出させてしまうなんて。
　カミュ、と呼ばれた少年は、ふと、口元に笑みを浮かべた。幼なじみが、何を気遣ってくれているのかに気づいたからだ。
　彼は、竪琴をおくと、友人の肩に手を置いて笑った。
「・・・そんなに気を遣ってくれなくても、僕はもう大丈夫だよ、ミロ。」
「・・・うん・・・わかってるけど・・・・」
大丈夫、の意味が違う、と、ミロは思う。三年前のカミュは、こんな大人びた笑い方はしなかった。自分たちと同じように、野山を駆けめぐり、たまには悪戯したりもした。
　それが変わってしまったのは、優しかった両親を一度に失ってからのことだ。
　三年前の春、いつものように南の風と共に戻ってきた旅人の中に、カミュの両親の姿はなかった。呆然と立ちつくしたカミュに、アイオロスは沈鬱に告げた。
　君のご両親は、医者として、傷ついた人々を放っておけなかったのだ、と。
　それからのカミュを、流石名医の息子だと誉める人は多い。確かにカミュは、急に大人になった。医学を学び、薬草の知識にかけては大人を凌ぐほどにまでなった。
　だがミロには、それが不安でたまらないのだ。
　生まれてからずっとそばに居たはずの幼なじみが、どんどん遠くへ行ってしまうようで・・・・
「ああ、ここにいたのですか、ミロ」

不意に、穏やかな声が二人の沈黙に割って入った。この神殿の神官を務めるムウが、集会所に集められた負傷兵の手当を終えて戻ってきたのだ。
「アイオロスが捜していたのですが・・・丁度良かった。カミュ、薬草が大量に必要になりそうなので、採りに言ってもらえませんか？ミロたちをつれて・・・」
「また新しい負傷兵が？」
「どうやら、隣のイダの町で戦闘になった様子です。先刻第一陣が二十名到着しましたが、まだまだこれから増えるでしょう」

南の強国ドリアが太陽帝国ドリアと国号を改め侵略戦争を開始してから、いつしか三年が過ぎていた。大国ドリアの圧倒的な戦力の前に周辺の共和国は次々に屈服し、今となっては、もともと天然の要塞に恵まれているリディアだけがかろうじて生き残っているにすぎなかった。

前線の町に既に人影はなく、兵士たちは、山間の小さな町で傷ついた身体を休めていた。背後に広大なシルスマリアの森をひかえ、山岳の嶮に守られたキールの谷は、開戦とほぼ同時に、軍の上層部によってそういった隠れ里の一つに指定された。
住民は町に待機し、前線の兵士たちの援護をせよ。
それは、男たちの徴兵免除を約束する一方で、女子供を含む非戦闘員たちの疎開の道が閉ざされたことを意味していた。
だが、やがて押し寄せる戦禍も知らぬげに、子供たちは至って元気であった。鏃づくりや薬草集めなど、むしろ嬉々として大人たちの手伝いをした。理由のひとつには、神殿に住んでいる赤毛の少年の存在があったかも知れない。薬草に詳しいこの少年が大人たちに混じって働いているのを見れば、彼らの労働も誇らしいものとなったに違いないであろうから。

カミュは、集会所に運ばれてきた兵士たちの傷を確かめると、すぐに外へ出て集まった少年たちへ指示を下した。血止め用にセイヨウノコギリソウ、鎮痛剤としてクルマバソウ、強心剤にはエニシダ。コンフリーは骨折治療薬。麻酔・解熱剤に使う猛毒のトリカブトは、種類を間違うと大変なことになるので、自分で採取することにする。

「中にはとても姿のよく似た毒草もあるから、怪しいと思ったら、籠の中には入れないで分けて持ち帰ってきて。そうしたら、僕が後でより分けるから」

「危ねえなあ。カミュが確認してくれるのは怪しい草だけなのか？」

カミュより2つ年上のシュラが、手渡されたエニシダの花をしげしげと眺めて呟く。

「誰とはいわねえけど、つい先頃もセリとニンジン間違った奴がいるからな」

「あれは・・・！」

慌てて口を挟んだのは、先刻カミュと共に居た少年である。折角名を伏せておいたものを自分から申告してしまうあたり、よくよく根が素直なのであろう。

「最初に見せられた葉が間違ってたんだよ！」

「ミーロ！どこの世界に畑でセリ育ててる奴が居る?!」

「そりゃそうだけど・・・！」

隣では、アイオリアが必死で笑いを堪えている。セリの代わりにニンジンの葉のサラダを食べさせられた記憶を思い出したからであろう。

「はい！提案！ミロの収穫分は全部カミュが目を通すこと！」

「あ！このやろー！デス、お前だってオレが教えなきゃナガイモとヘクソカズラの見分けつかなかったくせに！」

「それ言ったら、シュラだって似たようなもんだろ！こいつ、こないだオレに桑の実だって言って白桑の実食わせるところだったんだぜ?!危うくトリップするところだったじゃねえか！」

白桑の若い実には、軽い幻覚作用がある。とはいえ、普

通の桑にしては色の白いその果実の正体を見破ったのはその場に居合わせたカミュであって、少年が得意げに言うほどのことでもない。

つい可笑しくなって、カミュはくすりと笑った。

本当は、間違っては取り返しのつかないことになるような薬草は、この中にはないのだけれど。

「・・僕は、やっぱり君が全員分確かめるのがいいと思うけどね」

黙って聞いていたアフロディーテが、呆れたようにその場の会話を閉めた。

「兵隊さんたちがトリップしていい気分になっちゃうくらいなら別にかまわないけど。そのまま呼吸困難にでもなっちゃったら困るよね、やっぱり。」

「・・・分かったよ。君たちが採ってきてくれた分は、一応全部目を通すことにするから。」

梢から僅かに零れていた陽光が、急に弱くなった。

カミュは、血の流れる腕を押さえて天を仰いだ。じっと息をひそめて、耳を澄ます。敵兵の声は、聞こえるだろうか。

――――まさか、谷にまで敵兵の手が伸びていたなんて・・・・!――――

森に入り、ミロたちと別れて薬草を取り始めたとき、突然古エクシア語の叫びが聞こえた。古エクシア語は、ドリアの兵士たちが使う言葉だ――――そう気づいたときには、既に弓矢が頭上をかすめていた。

甲高い、子供たちの悲鳴。

カミュも右腕に矢傷を負った。毒矢でなかったのが幸いだった。

背後を山に、前方を断崖に守られたキールの谷の、シルスマリアの森。

絶対、安全だと思っていたのに・・・・・!

――――殺されたかも知れない・・・・・――――

たまらなくなって、両耳を塞いだ。まだ、耳の奥に聞

こえている。助けて、と叫んでいた。それから、急に悲鳴が止んだ。

あれはシュラ？アイオリア？それとも――――

ドリアでは、戦の勝利を祈願して、彼らの神である太陽神に捕虜の命を捧げるという。生け捕りにされたのだとしても、その未来は決して明るくはない。

カミュは、滲んできた涙を無理矢理に拭って、再び歩き始めた。

今はとにかく、生きて戻ってこのことを報告しなければ。

だが、彼の足は、ただあてどなく歩みを進めるだけであった。天を見上げても、太陽の姿は見えない。どちらの方向に歩んでいるのかもわからない。

敵兵に追われて闇雲に逃げ回るうちに、カミュは谷の大人たちでさえ知らない森の奥深くに迷い込んでしまっていたのだ。

・・・・だ・・れ・・・・？

風が、呟いていた。森の中にぽっかりと開けた、静かな湖の畔で。

小さな少年が、たったひとりでやってきた。青く澄んだ湖水の中に、はっとするほど赤い髪をたゆませて。

少年は、小さな右腕をその細い髪と同じ色彩に染めていた。彼は慣れた手つきで傷口を洗うと、手にしていた籠からセイヨウノコギリソウの葉を取り出し、軽く揉んで傷口に当てた。

まだ、小さな少年なのに。

あれは、きっと矢傷に違いない。

・・・・おまえ・・は・・・だれ・・・・？

風は、再び呟く。その柔らかい髪の間をすりぬけながら。

彼は、全てを見て知っていた。ここより少し南の町で、人間たちが殺し合っていること。乾いた地面が全て深紅の血で埋め尽くされるほど、殺し尽くして手に入れた土地も、次の夏には麦粒ひとつ実らないこと。

大旱魃がやってくるのだ。
ドリアよりもっと南、イオニアの国では、蝗の大群が発生して既にその兆候が見えているのに。
人間たちは、自分の目の前にあることしかわからない。
こんな小さな子供まで戦いに巻き込む必要が、どこにあるのか・・・・

ふと、カミュは顔を上げた。さっきから、誰かが自分に話しかけているような気がする。
振り返って、背後を見つめ直した。誰もいない。
・・・けが・・を・・・したの・・・？
声は、風の中から聞こえているような気がした。人の声ではありえない、けれどどこか懐かしい響きのする声。不思議と、恐怖はなかった。湖の上を渡る風を見極めようとするかのようにじっと空を見つめると、風の音は少しずつはっきりと一連の言葉を紡ぐようになった。
『・・・私の森へ、ようこそ。』
「誰・・・？」

咄嗟に、カミュは風に向かって訊ねていた。風が喋っているとしか思えなかったので。
「どこにいるんですか？」
『君の目の前に。』
カミュの目の前で、薄い霧が何かを形作っていく。それはゆっくりと人の形を成し、やがて一人の青年の姿を映し出す。
「あ・・・・」
思わず、溜息が口をついた。目を擦ろうとしたが、全身が金縛りに遭ったように動かなかった。湖の上に、人が浮かんでいるのだ。優しげな瞳をして、細い光の糸のような銀色の髪を、滝のように肩口から流し落として。
こんな綺麗な人、見たことない・・・・
陶然とその姿を見つめていて、ふと我に返った。輝く白い肌も薄青の衣も、僅かに透明に透けて対岸の木々を映している。人であるはずがない。それはおそらく、霊といわれるものに最も近い・・・・・
『幽霊ではないよ。私は風の精霊・・・』
「・・・精霊？」

『今はね・・・。』

風の精が寂しそうに微笑む。カミュはいたたまれない気持ちになって黙り込んだ。

風の精は、キールの人々にとっては非常に近しい存在だ。

まだ戦争が始まる前、人々は春が訪れるたびに、風の精を谷に呼び込んでいた。

風と共に戻ってくる、親しい人達と共に・・・・。

『・・・ひどい傷だ。みせてごらん』

不意に、深い声がカミュの追憶を遮った。彼はそっと少年の腕をとると、傷口を縛った布の上から静かに右手を重ねた。

柔らかい感触。手のひらで弾ける光が、傷の痛みを拭い去っていく。

「あの・・・?」

『・・・もう塞がったよ。包帯を取って御覧』

カミュは、慌てて縛っていた布を解いた。骨の近くまで深く裂けていたはずの傷口が、殆ど癒えかかっていた。

痛みに苦しむ者を癒す、優しい力。

「あ・・・ありがとう・・・・」

思わず、素直な感謝が口をついた。そして、まっすぐに微笑んでいる瞳を覗き込んで、どきりとした。

・・・なんて寂しそうな色をしているのだろう。

精霊だというなら、神様に近い存在の筈なのに。

胸を掴まれたのは、風の精も同じであるらしかった。少年の、夕日の色を溶かし込んだような二つの瞳に見つめられて、捕らわれたように動けなくなった。

遠い昔、確かに、こんな瞳で自分を見つめてくれていた女性がいたのだ、と。

『・・・君の名前は?』

夢の続きのように訊ねた声に、小さな呟きが返る。

「・・・カミュ・・・・・」

風の精はサガと名乗った。時も忘れる程長い間、ここ

にいたのだと言った。けれどカミュはこの湖を知らなかった。カミュだけではない。おそらく谷の大人たちも

――――――

『普段は見付けられないのだよ。』

サガは、事もなげにそういった。

「え・・・？」

『一年に一度だけ、外界への道が開かれる。大神セレスが、闇の支配をうち破って復活されたこの日に・・・』

神話によれば、光の神セレスは闇の王に三度戦いを挑み、ついに勝利を得て神々の王の座についたという。その時から地上は光に満ち溢れ、人々は天地の恵みに感謝して復活祭を捧げるのだ。

戦争がおこってからは、儀式の大部分は削られ、ただ神官が神殿に於いて祈りを捧げるのみになってしまったけれど。

「そうか・・・今日は――――――」

その、復活祭の日なのだ。ムウが真新しい蝋燭を何本も用意していたのを思い起こし、カミュは小さく頷いた。ならば、谷の誰もがこの場所を知らないのも無理はない。・・・復活祭の日には、皆神殿に集まって、帰ってきた人々の無事を祝うのだから。

『・・・ごくたまに、道に迷った人がやってくることもある。君のように。・・・前回のお客は、君によく似た少女だった・・・あれは、君の母上だったのかな？』

「え・・・・・?!」

思いがけない言葉に驚いて向き直ったカミュの側をすり抜け、サガはつと水辺の岩場に近付いた。岩場の上に、三日月型をした金色の竪琴がある。それを音もなく取り上げると、彼はそのまま岩に腰掛けて、細い弦をつま弾き始めた。

――あ・・・この曲・・・・・!――――

思わず、カミュは息をのんだ。それは、かつて彼の母親がつま弾いていた曲だったからだ。

彼女でさえ最後まで知らなかった、いにしえの旋律――

――――――

しばらくの間、森の木々さえもざわめくのを止めたようだった。時がさかのぼる。遠い、はるかな神話の時代へと。

胸の前で組み合わされた手が僅かに震えているのを、カミュは感じていた。そう、ずっと奏でてみたかった。誰かの追憶のように紡がれるこの旋律を、最後の一音まで。

一度でいいから。

「・・・あなたの曲だったんですか・・・・・・」

かすれた声が、喉を突いた。誰も知らないはずだ、と思った。風の精が奏でる旋律だったのなら。

『・・・君は、最後まで知らなかったのだね？』

「はい。でも、どうしてそのことを？」

『君が弾いているのを、よく町の神殿で見かけた。いつも、同じところで止まっていたから。・・・だから、あの少女は君の母上だったのだろう、と思った』

「何故・・・？」

母は最後まで知らなかったのか、と。そう訊ねたかった。だが、何故かそこで口ごもってしまったカミュに、サガは淡い微笑みを返して呟いた。

『・・・そう・・・何故、彼女は覚えていたんだろうね・・・・・』

キールの町は、ざわめいていた。

子供たちが、森でドリアの兵士たちと遭遇してしまったのだ。太陽はもう傾きかけているというのに、戻ってきたのは半数だけ。アイオリア、アフロディーテ、カミュの三人はどうしてしまったのだろう？

「悲鳴が聞こえた・・・助けにいこうと思ったのに・・・・！」

頬にかすり傷を作ったシュラが、悔しそうに歯を食いしばる。アイオロスは、なだめるようにその肩に手を置いた。

シュラは常に、子供たちの中の最年長を自負している。自分が守らなければ、と、重すぎる責任を己に課していたのだろう。

「・・・無茶はするんじゃない。お前一人で、大人相手に何ができる？」

「でも・・・・・！」

「いい。三人は、俺たちが必ず探し出すから。お前は、無事戻ってきた少年団の束ねをしっかりやってくれ」
有無を言わさぬ口調で告げられて、シュラはこくりと頷いた。確かに、彼にはまだ別の仕事が残っていた。無鉄砲きわまりない、彼の仲間たちの暴走をくい止めるという大仕事が。
「そのことなんだが・・・・」
隣から、黙って聞いていたもう一人の少年が口を挟む。
「どうした?デス」
「さっきから、ミロの姿が見あたらないんだ。あいつ、ひょっとしたら奴らを捜しに行ったのかも・・・・」
「何だって?!」
開いた口が塞がらない、とはこのことだ。アイオロスは、思わず両の拳を握りしめた。待機していたキールの義勇軍が追い払ったとはいえ、まだ森のどこかにドリアの残留兵士が潜んでいるかも知れないのだ。それでなくても、日の落ちかけた森は足下が暗く危険きわまりないというのに。
「散々怖い目にあったばかりのくせに・・・一体何を考えているんだ、あいつは!」
ミロの怖いものしらずは承知しているつもりでも、舌打ちのひとつもしたくなる。
迂闊だった。
カミュが戻ってこなかった時点で、その可能性を十分に考えておくべきだったのだ。
「シュラ、デス、ムウに伝えておいてくれ!俺はあのバカを捜しに行く!」

『君の友人たちは、ドリアの兵士に捕らわれているよ。怪我はしていないようだ』
上空へ様子を見に行ったサガが、戻ってきて告げた。子供が二人、牢で鎖に繋がれていた、と。
『黒い髪をした背の高い少年二人は、谷に戻っている。連れ去られたのは、うす茶色の髪をした子と、ブロンド

の巻き毛の子だ』

「アイオリアと・・・ミロ？」

ぞくりと、カミュは身体を震わせる。ミロが捕まった？

ドリアの兵士たちに――――

『・・・君のことも、みな心配している。そろそろ、戻った方がいい。・・・連れ去られた子より少し濃い色の金髪の少年が、この森で君のことを捜している。このままでは、迷ってしまうだろう・・・』

「え・・・？」

弾かれたように、カミュは顔を上げた。違う。そっちがミロだ。

では、連れ去られたのはアフロディーテか・・・・・・

どこかでほっとしてしまった自分を、カミュは恥じた。アイオリアもアフロディーテも、大切な友人だ。ミロと比べる事なんて、出来はしないのに。

――それでも・・・・――――

どんなときにも、怯まずまっすぐに自分を見つめてくる、青碧の瞳。

彼が居なければ、とうの昔に自分の心は現世を離れてしまっていたかも知れない。

『彼が道に迷う前に、早く、行きなさい。この世界の外までなら、送っていってあげられる』

何かを吹っ切るように、サガが告げた。――――その瞳の色は、固く閉じられていてわからなかったけれども。

「この世界の外までなら、って・・・何故？」

『私は、ここでしか人の姿にはなれないのだよ』

やっと、二つの双眸が開く。森の緑を映し込んで、怖いほどに透徹した光。

「・・・こんな・・・戦争なんかじゃなかったら、一日ぐらい帰らなくても構わないのに・・・・」

不意に、溜息がカミュの口をついた。サガが何故瞳を閉じたのか、分かったような気がした。

彼は恐らく、その瞳の翳りを自分に見られたくなかったのだ。

初めに見て、この心に焼き付いてしまった、あの寂しげな、哀しげな瞳――――

「今日戻ってしまったら、また来年の復活祭まで会えないんでしょう？」

『・・・カミュ・・・？』

「こんなによくしてもらって・・・僕はまだ、あなたに何のお礼もしていないのに！」

思わず激しい口調で言いつのってしまって、少年は悔しげに両手を握りしめた。違う。本当に言いたいのは、こんなことじゃない。こんな寂しげなひとを、ここにおいていきたくない。

「・・・本当に、来年まで会えないんですか・・・・？」

かすかに瞳を潤ませた夕日色の少年を、サガは言葉を失ったまま見つめていた。遠い昔に封印したはずの胸の痛みが、暖かな懐かしさを伴って蘇ってきた。

かなうなら、この腕の中に抱きとめておきたかった。

けれど、決して繰り返してはならないのだ。

人と精霊では、生きる時間が違うのだから・・・・！

『・・・お帰り。日が沈む頃には、この世界の門が閉ざされてしまう。そうしたら、人の身体では入ることも出来なくなってしまうのだよ』

自らの言葉が、重い痛みを伴って胸に突き刺さる。

方便ではなかった。

そうして、命ある者は全て息絶えるのだ。ここには、生きているものなど何ひとつないのだ。

「・・・あなたは、これから一年は他の精霊たちと暮らすんですか？」

少年は、不安に駆られてなおも食い下がる。こんな広い世界にたった一人で生きるなんて、あまりにも寂しすぎるから。

サガは、答えなかった。

カミュは、知らなかったのだ。

こうして人の姿をとれる精霊など、本来はいないのだということを。

『・私は風の精だから。風の吹く所なら、何処でも行ける。心配しなくても、いつもカミュのそばにいるよ・・・』

II　青の旋律

カミュが目覚めた時、枕元にはミロがいた。ミロが森で倒れているカミュを見付け、その二人を後を追ってきたアイオロスが見つけたのだ。
「本当、無事で良かったよ。倒れているのを見た時には、もう駄目かと思った」
ミロが果物ナイフと格闘しながら笑った。ウサギにやるには豪勢すぎるリンゴの皮が、膝の上のボールに高々と積み上げられている。いっそ剥かない方がよさそうなものだったが、これでも彼なりに病人を気遣っているのだ。
「何も・・覚えてないんだ。ドリア兵に襲われて、怪我をして、森の奥まで逃げ込んだ所までは覚えてるんだけど・・・」
「お前、あんまり丈夫じゃないからな。ショックで脳震盪でも起こしたんじゃないのか？」
「うん・・・」
それなら、ほとんど治りかけた矢傷は何だというのだろう。既に包帯もとれた右腕を見つめて、カミュは思う。傷を負ったところまでは、はっきり記憶に残っている。確かに、こんなに浅い傷ではなかった筈だ。
ミロは、初めからかすり傷だったのだろうと思っているようだった。
きっと、誰が見てもそう思うに違いない。
「そうだね・・・きっと。」
このことは黙っていよう。そう、カミュは心に決めた。
「・・・他のみんなは？」
ずっと気にかかっていたことを訊ねてみる。芳しい答えは返ってこないであろうことは、ミロの表情を見ていて分かっていたけれども。
「シュラやデスは無事だよ。シャカも。でも――――」

いつも快活な少年は、悔しそうに唇を噛んだ。
「アイオリアとアフロディーテが捕まった」
「そうか・・・」
不思議と、カミュは驚かなかった。あらかじめ、知っていたような気がしたからだ。
「・・・でも、きっとアイオロスたちが助けてくれるよ。カミュはもう少し休んだ方がいい。あんまり顔色が良くないよ。」
ベッドの上に上半身を起こしているカミュの身体をそっと横たえて、ミロはむき終った林檎を差し出した。

神殿から、優しい竪琴の音色がこぼれ落ちている。
慌ただしく介護に走り回る女たちや、傷が癒えかかり神殿に加護を祈りに行く兵士たちが、一瞬、足を止めてその音に耳を傾ける。
戦争が始まる前は画家だったという兵士が、その音を聴いて一言呟いた。『俺だったら、この音はとびきり上等の群青で塗ってやるさ』と。
誰からともなく、その旋律を『青の旋律』と呼ぶようになった。それは確かに、空の青、深い湖の青を思わせる旋律だったので。

「・・・その曲、最後まで弾けるようになったんだ?」
集会所から配給の食料を受け取ったミロが、カミュの分のパンを手渡して不思議そうに訊いた。
「どうして?誰も知らない曲だっていってたのに・・・・」
「・・・わからない」
「わからない・・・って・・・・」
更に言い募ろうとして、金色の少年は困ったように口を噤む。あの、森で襲撃を受けた日から、カミュはずっと何事かを考え続けている。まるで、彼を気遣うミロの声も聞こえていないかのように。
カミュは、途中までしか知らなかったあの曲を、最後

まで弾けるようになっていた。
どこで教わってきたのかもわからない。ただ、以前にもまして寂しげな、その音色。
――何かを、忘れてしまっている・・・・――
カミュは思う。何か、決して忘れてはならない大切なことだったのに、と。
「ミロ・・・・」
小さく、夢を見ているような口調が、呟いた。
「・・・何？」
「僕は・・・本当に一人だった？君が僕を見つけたとき――」
失った時間が、もどかしい。自分は、本当に一人だったのだろうか。あの森の中で？
ミロが、びくりと肩をゆらした。それは、既に何度も耳にした言葉だった。何度も訊かれ、何度も答えたその問い。
「・・・一人だったよ。君しかいなかった。・・・どうしてそんなこと・・・・」
ミロの、握りしめた拳が震える。
「どうして、いつまでもそんなこと気にしてる?!君が無事に戻ってきた・・・それだけじゃだめなのか?!」
抑えようにも、抑えきれなかった。カミュが何かに心を捕らわれているのは、ずっと側にいるミロには目に痛いほど明らかだったから。
「リアやアフロは、今でもドリアに捕まってるんだ！君だけが、奇蹟のように帰ってきた！俺は・・・俺は・・・・っ・・・・」
そのことを、神に感謝した。他の誰でもない、カミュがこの手の中に戻ってきたこと。
――最低だ・・・・！――
アイオリアもアフロディーテも、大切な友達なのに。
血が滲むほど唇をかみしめた幼なじみの様子に、カミュははっと我に返った。本当に、自分は何を気にしているのだろう。今も毎日、命の危険にさらされている友人が居るというのに。こんなに、心配してくれているミロの気持ちを踏みにじって。
「ごめん・・・ごめん、ミロ・・・・・・・」
俯いて、必死で悔し涙を隠している少年の髪を撫でた。

柔らかい巻毛が、指にまきついた。
どうして、こんなに胸が苦しいのだろう。
たった半日間の記憶がないというだけなのに――――

『青の旋律』の途切れてしまった神殿の階段を、息を切らせて駆け上がってくる少年の姿がある。
今は谷の中の伝令の役目をいいつかっているシュラは、神殿に駆け込むなりまっすぐにカミュの部屋へと飛び込んだ。
彼らの友人の命を左右する、重大な辞令を伝えるために。
「大変だ！アルドゥスの伝達が――――！」
はっとして、カミュが顔を上げる。ミロも、弾かれたように立ち上がる。
「・・・明日午後零時、ドリアに全軍総攻撃だって!!」

イダが落ちた。
カレンも、リオも、既に数日前に壊滅していた。
前線の町を生け贄にして、首都アルドゥスは着々と力を蓄えていたのか。
敵国に捕まった前線の人々の存在を全く無視して、軍首脳部は全軍総攻撃の命を下した。

「何だって　それじゃアイオリアとアフロディーテは・・！」
アイオロスが手を関節が白む程握り締める。
「アルドゥスからの命令なんだ・・・もうどうしようもない」
「見殺しにしろというのですか！」
「アイオロス・・・」

キール守備軍の隊長を務めるシオンも、苦しそうに呟いた。

「私とて思いは君と同じだ。だがここで足並みを乱せば、余計に被害者を増やすことになる」

「シオン・・・」

アイオロスにも解っていた。今は団結を乱すべき時ではない。たとえ弟の命がかかっていてもだ。

「・・・だけど・・・あんまりだ!!」

思わず叩きつけた拳の下で、辞令を記した羊皮紙が乾いた音を立てた。

以前から、アイオロスは軍首脳部のやり方を苦々しく思っていた。辺境の町を、町とも思わない作戦の数々。首都さえ無事ならいいのだと言わんばかりの、軍人たちの態度。

国境近くの町は、常に危険にさらされている。

だが、それは仕方のないことだと諦めてもいた。故郷を捨てられない限り、どう足掻いても、最後に矢面に立つのは結局自分たちなのだから。

だが、今回の悲劇の根は、軍首脳部が出した辞令にある。

救急要員として働かせるために、女子供の疎開を禁じたこと・・・・

「・・・あいつらだって、人の親じゃないのか?!子供たちの命を犠牲にしなければ、本当に戦えない戦だったのか?!」

「アイオロス、声が大きい！まだ伝令はこの谷に居るんだ」

「かまうものか！俺たちは正式には軍に所属していない！そうでしょう?!シオン!!」

瞬間、静寂が訪れた。いくつもの戦いを戦い抜いてきた歴戦の戦士が、何かに打たれたかのように、双眸を見開いた。

「・・・そうだ・・・我々は、正式な軍人じゃない・・・・」

「・・・シオン?」

リディア軍の規律は、確かに厳しい。命令に背けば、いとも簡単に首が飛ぶ。

だがそれも、軍隊に属していれば、の話だ。

「・・・よく言ってくれた・・・アイオロス、子供たち

を救えるかもしれんぞ！」
　急に輝きを取り戻したシオンの瞳を、アイオロスは呆然と見つめた。
「そんな・・・・どうやって?!」
「すぐに谷の若者を全員集めろ！それで義勇軍を編成し、総攻撃に参加するのだ。どうせ、上の奴らは辺境の人間など人とも思っとらん連中だ。間違いなく、第一陣の突撃隊に編入されるだろう・・・とにかく、どんな手を使っても敵地進入を果たして、真っ先に人質を救出するのだ」
「何ですって・・・?!」
「なに、正式な軍隊じゃない。少々命令無視したところで、悪くても私やお前の首が飛ぶぐらいだろうさ」
　子供たちの命を、切り捨てられて。裏切られたのは、自分たちの方なのだ。
　最後まで義理を立てなければならない理由が、どこにある？
　アイオロスは、ふと笑みを湛えて頷いた。
　最悪の事態を避けるために、この自分に出来ることがあるなら。恐れることなど、何もありはしない。
「・・・分かりました。俺は、命を懸ける覚悟は出来ています。しかし、若者が全員出払うとなると、この町は――――」
　前線から殆ど離れていないキールの谷が、無傷であるとはとても思えない。
「勿論、ドリアに無抵抗で明け渡すことになるな。残る者は疎開させよう。幸い、サマリアが受け入れてくれると言っている」
　こともなげに告げるシオンの言葉に、アイオロスはごくりと唾を飲み込んだ。・・・この町を代償に、子供たちを助けに行く。それでも、間に合う可能性は決して高くない。
　谷の人々は、納得するだろうか。
「・・・凄まじい賭けですね・・・」
「だが、キールに残った所で必ずしもここを守り切れるとは言えない。・・・それに何よりも、アイオリアもアフロディーテもまだ子供だ。私は谷の人々の心を信じているよ」
　シオンが、年若い青年団団長を勇気づけるように笑う。

アイオロスも、青ざめた顔にやっと笑みを上らせた。

「総攻撃だって！」

「ちっくしょ――――っ！リアやアフロはどうなるんだよ！」

吐き捨てるようにミロが言う。カミュはただ、遠くを見つめるような眼差しで、呆然と立ちつくしている。

「だからアイオロスたちが助けに行くんだよ。・・・もっとも間に合うかどうかは分からないけどね」

普段は落ち着いているシャカも、流石に声が沈んでいる。誰もが不安を隠し切れなかった。

「さあ・・・町を出る準備をしよう。もう二度と帰って来られないかも知れないんだ・・・」

年長らしく、シュラが少年たちを見渡して言う。いくつもの小さな顔が、俯いたままこくりと頷く。

どうしよう。

カミュは混乱する頭を冷まそうと、泉の水を顔に浴びせかけた。

二人の救出は、間に合わない。

それはカミュの予感だった。そしてカミュは、経験からそれがほとんど当たることを知っていた。あの時――両親が戻ってこなかった日にも、カミュには初めから判っていたのだ。

斥候の報告によれば、ドリアに捕らわれている捕虜は十人余り。そのうち、子供はアイオリアとアフロディーテの二人だけ。

総攻撃で不意打ちを食らったドリアは、彼らの崇める太陽神に加護を求めるため、二人の子供の命を捧げるだろう。

「泣くな・・・・・！」

泣きたくはなかった。泣くのは、恐ろしい予感が的中

してしまうのを認めることだ。それでも、涙は勝手に溢れてきた。カミュは、悪い予感を振り切るように手の甲でごしごしと涙を拭った。

「お嬢ちゃん、何を泣いているんだい？」

野太い声が何事かを語りかけているのに気づいたのは、泉の水を三度ほど被った後のことだ。背後からかけられた声にびっくりして、慌てて後ろを向いた。見知らぬ男だった。

「誰・・・・・？」

近付いてきた黒い影に、視界が暗くなる。

声を上げる暇もなかった。男の手が深くカミュの喉に食い込み、そのまま容赦なく泉の中へと沈められる。息がつまる。頭上で、ゆらゆらと水面が揺れている。

もがく力も失って、カミュは急速に意識を遠のかせていった。

「失敗したな。男か・・・」

重たげに水を含んだカミュの身体を引き上げて、男は小さく舌を鳴らした。キールの谷にはまだ女がいる。そう聞かされて、やっとのことでうるさい監視をくぐり抜けてやってきたというのに、とんだ道化もいいところだ。

「まあ・・・だが、うちの男どもよりはましか。」

青ざめた顔を仰向かせ、じっくりと全身を検分する。

長い遠征で、体は快楽に飢えきっていた。軍隊では、入りたての新米が常にそんな欲望のはけ口になっていた。こいつは、うちの一番ましな奴よりも全然いい。濡れた髪は極上のルビーの色だし、日に灼けていない肌も大理石みたいだ。

濡れた衣服をはぎ取って、男はちろりと唇をなめた。泣こうが喚こうが、知った事じゃない。どうせ用が済めば、殺すだけのことだ・・・・

胸の重みに気付いて、カミュは薄く目を開いた。途端に全身が総毛立つ。節くれだった指が、ねっとりとまとわりつくように肌を這い回っている。

「は・・・放せ！」

精一杯叫んだつもりだった。しかし、耳に届いた声は弱々

しかった。身体も動かない。その時、カミュは口の中の薬品臭に気付いた。気絶している間に何かを飲まされたのだろう。カミュは必死でもがきながら、男の素姓を探ろうとした。

襟元に光る、太陽の紋章。

――ドリア軍・・・!――――

「お前・・は・・・・!」

かっと身体が熱くなった。彼らがアイオリアとアフロディーテを連れ去った。卑怯にも、何の力もない子供を。

「放せ!貴様、よくも・・・・!」

力の入らない腕で、男の厚い胸板を叩く。

「返せ・・・リアとアフロを返せ――――――っっ!」

必死の抗議に、男が声を上げて笑った。組み敷かれて身じろぎも出来ないくせに、返せとはいい度胸だ。

「嬢ちゃん、言葉に気をつけな。死ぬ前に痛い目をみたくなかったらな」

すっと、ナイフを喉元に滑らせる。思わず凍り付いたカミュの喉に、薄く血の線が滲む。

「・・・お前、あのガキどもの仲間か」

カミュは無言のまま、男を睨み付けた。この男は、あの二人を知っているのだ。

「いいことを教えてやる。あの小うるさいガキどもは、明日の朝には血祭りに上げられるのさ。生きたまま、心臓を剔り出してな」

「な・・んだって・・・・・?」

「仕方がない。生け贄は若い方がいいって話だからな。まあ、安心しろよ。どうせ、奴らよりお前の方が先に死ぬ」

一瞬、自分の身体をいいように組み敷く男の存在を忘れて、カミュは呆然と宙を見つめていた。

明日の朝・・・?では、アイオロスたちは絶対に間に合わない。

どんなに急いでも――――――!

人形のように大人しくなった少年の足を、男はこともなげに抱え上げた。カミュには、自分が何をされようとしているのか分からなかった。男女の正常な交わりでさえ知らないのだ。分かるはずがない。

だが、柔らかい襞に熱い塊が触れたとき、本能的な恐怖が背筋を走った。まともな声が出せたのは、奇蹟だっ

たかも知れない。カミュは、渾身の力を振り絞って身を捩りながら叫んだ。

「放せ！さもないと・・・！」

どんなことが起こると、いいたかったのか。

叫んだからといって、自分に何かが出来るという確信があったわけではなかった。しかし――――

「な・・・何だっ!?」

――風・・・?!――

カミュの周りに、突然すさまじい突風が吹いたのだ。驚いて飛びすさった男に、疾風が巻きつく。物をこするような鋭い音がそれに続いた。皮膚が裂ける音だ。血飛沫が、霧のように散乱した。

「うわあっ！」

悲鳴を上げながら、男はカミュを引きつった表情で見上げる。血の色の髪、血の色の瞳。

「この・・・悪魔・・・！」

だが実のところ、悪魔よわばりされたカミュにも、何が起こったのかは分かっていなかったのだ。何故急に風が吹いたのか。何故自分は傷つかないのか。

「どうして――――」

男が逃げ去った後も、カミュは服を直すのも忘れて宙を見つめていた。風は、今は渦巻くことを止め、さやさやと流れている。

・・・・カミュ・・・・

記憶の中に蘇る声。カミュの両目が見開かれる。

――あれは・・・・――――

翠緑の瞳と、青銀の髪。

不意に、彼の中で記憶の膜が弾けた。長い間胸につかえていたものが、ゆっくりと解けていく。封じられていた時間は動きだし、いくつもの謎が氷解していった。

失っていたものは何だったのか。何故、あの旋律を最後まで弾けるようになっていたのか。

涙が一度に溢れ出る。流れ落ちる滴を幾度も指先で払って、カミュは微笑んだ。失われていた名前を自分の口が紡ぐのを聞きながら。

「サガ・・・・・」

「サガ！聞こえているんでしょう？お願いだから、道を開けて！」

静かな森に、悲壮感さえ漂わせた少年の声がこだまする。

カミュは、もう半刻以上も声を涸らして叫び続けていた。先日迷い込んだ森。自分の力でたどり着くことは、もはや出来まい。あの湖への道を見付けられるのは一年に一度、たった一日だけなのだ。

「サガ・・・サガ・・・・・・」

見い出せなければ今度こそ森の奥深くに迷い込むことになるだろう。カミュはそれでもかまわないと思った。今はただ、あの優しい風の精霊に逢いたくてたまらなかったから。

さらさらさら・・・

不意に、カミュのとぎ澄まされた耳が、小さな水音を捉えた。

「・・・サガ？」

耳を澄ませてみる。幽かな、本当に幽かな、水の音。幻聴かも知れない。あるいは、この世ならぬものの音が聞こえているのか・・・・

カミュは水音の方に歩いて行った。音のする方に湖はない。それでも、カミュは構わずに進んだ。それは、彼の中に深く根を張った、確信めいた予感だった。

歩いて、歩いて、歩き続けて。幻覚に誑かされているかのように、何度も同じ場所へ引き戻された。頼りになるのは、耳の奥に小さく聞こえている水音だけ。いつの間にか、カミュの手足は折れた小枝に切り裂かれて傷だらけになっていた。それでも、少年はただただ歩き続けた。

そしてとうとう、これ以上進めないところまでやってきたのだ。

――何？空気の壁が・・・――――

前方から強く押し戻す力を感じて、カミュは立ち止まる。見た目には、何の変哲もない森の姿に見える。だが、一歩足を踏み出そうにも、強烈な力が反発して進めない。

「ここなのか・・・」
　ふと、呟きが少年の口をついた。カミュはすがるように天を見上げる。開かない。湖への道は閉ざされてしまった。
「サガ・・・お願い・・・会いたいんだ！」
　その瞬間、ふっと空気の壁が消えた。一瞬視界が白濁し、水音がはっきりと鼓膜を打つ。光の沈んで行く中に姿を現したのは、大きな湖だった。あの時と同じ、澄んだ水を湛えた湖。
「あ・・・・」
カミュは言葉もなく立ちつくす。
『全く・・・君という子は・・・』
　背後から風のような声が聞こえた。
「サガ?!」
『もう一度会えるとは、思っていなかったよ。』
カミュは後ろを振り向いた。背の高い人影。透ける銀の髪。翠緑の瞳は、怒ってはいなかった。
「・・・ごめんなさい！無理を言って・・・約束を、破ってしまって・・・・・」
言葉がもどかしく口をつく。ただただ、謝りたかった。特別な日ではないのに、押し掛けてきてしまったこと。あんなに約束したのに、この寂しげな風の精のことを忘れてしまっていたこと――――
『・・・それは、いきなりやってきたことを言っているのかな？』
「それもあるけれど、でも――――――！」
ふと、サガは少年の唇に人差し指を当てた。もう、何も言わなくてもいい、と言うように。
『・・・分かっている。君のせいじゃない』
「サガ・・・・・・」
　その言葉はあまりに穏やかで、小さな少年の胸を締めつけた。分かっている、とはどういうことだろう。彼は初めから、自分が忘れられてしまうことを覚悟していたのだろうか。
『・・・君は、自分の力でこの世界への道を見つけたのだよ』
　不意に、サガが呟いた。どこか寂しげな口調で。
「え・・・・・？」
『君は、私が君を招いたと思っているのだね？』

「・・・違うんですか?」

『私は何もしていないよ。・・・いや、出来ないというべきかな・・・』

終わりの言葉は、独り言に近かった。カミュは一瞬逡巡して、ついにずっと抱き続けてきた問いを口の端に乗せた。

あなたはどうしてここにいるのか、と。

『どうして、か・・・』

畏れずまっすぐに見つめてくる深紅の瞳を、じっと見つめる。少年が、単なる好奇心から訊ねているのではないことを、サガは既に知っていた。カミュは心配しているのだ。いつも一人でいる自分を。

『・・・聞きたければ、言っても構わないが。ただ、きっとまたここを出た途端に忘れるよ。』

「ごめんなさい!でも、今度はきっと忘れない!さっきもサガが助けてくれたんでしょう?!僕は・・・それで全部思い出したんだ!」

『カミュ・・・』

そうなのだ。カミュは一度失った記憶を取り戻したのだ。セレスの施した暗示を振り切って。

サガは全てを話してみようかという気になった。カミュなら、或いは自分のことを覚えていてくれるかも知れない。

遠い昔に罪を犯した、誰も知らない、一人の神の物語を。

『そうだね・・・君になら・・・・・』

サガはカミュに湖の辺りの岩に腰かけるよう身振りで示すと、自分も腰を下ろして静かに話し始めた。

『私は・・・もともとここにいた訳ではない。かつては大神セレスを初めとする神々の集う世界に生きていた。その頃は、人間たちと神々は同じ世界に在ったから、私も人界に降りることが多かった。私は人間が好きだった。そして一人の少女と恋におちた』

「人間の・・・?」

『そう。君のような、美しい紅の髪の少女だったよ。』
　サガが微笑う。
『けれど彼女はすぐに死んでしまった。元から身体が弱かったのに、私の子供を身ごもったことで力を使い果たしてしまったんだ。私は絶望に何も見えなくなり、罪を犯した・・・。剣の神アストールの神殿に忍び込んで、神々の命を奪うという宝剣を盗みだし、胸に突き立てたんだ』
「そんな・・・・・・!」
『自殺は天界では最も忌むべき行為なのだよ。永遠の命を与えられながら、それを捨てることは許されない。私は肉体を放棄した罰として天界を追われ、魂のみで生きることになった。罪を犯した原因は人間だったから、人に会うことも禁じられてしまった。全ての罪人が許される、大神セレスの復活の日以外にはね・・・・。』
　だが、それが何だというのだろう。
　セレスが赦した一年に一度の解放は、サガの孤独をいっそう増しただけであった。いっそ、誰にも逢えない方がまだましだったかも知れない。たまに訊ねてくる人間たちは、この森を出た途端にその記憶を全て失ってしまうのだから。
　カミュが思いつめた瞳で問う。
「・・・では、あなたは自分からこの世界に来た訳ではないの・・・？一年に一度しか会えないのは、あなたがそう決めているからではないの・・・・・？」
『・・・全て大神セレスのお心なのだよ。君がここを出た途端全てを忘れてしまったことも・・・』
　淋しさに、気が遠くなりそうだ・・・・・
　カミュはそう思った。どれだけ月日を重ねても、どんなに愛しても、誰の心にも残らない存在。
「サガ、・・・僕は、また来ます。」
『カミュ・・？』
「毎日は無理でも・・・一週間に一度は必ず来ます。許してくれるなら、ミロたちも連れて・・・」
　自分に出来ることは何だろうか。どうすれば、この人の孤独を和らげることが出来るだろうか。
　必死な眼差しで見上げる少年を見つめて、サガは溜め息をついた。それは、幸せな溜め息だった。
『・・・有り難う。気持ちだけ貰っておくよ。私は普段

は風の中に居る。だから淋しくはないのだよ・・・そう何度も結界を破ると、今度は君にセレスの怒りが下されるだろう。君は結界を解く力を持っているようだから。』
「そんな・・・僕は何も・・・」
サガはカミュの髪に指を差し入れて、いとおしそうに撫でる。柔らかい髪だった。
『オーラが乱れている。何かあったのだね？心配事が――』
「・・・わかるんですか？」
『わかるよ。』
カミュはこくりと頷いた。アイオリアたちのことだった。
「さっき・・・ドリアの兵士に会いました」
正確には、会ったという状況ではない。だが、そのいきさつは、勿論サガも知っている。
「アイオリアとアフロが・・・明朝、生贄にされると・・・・・」
その先は、声が喉に詰まって言葉にならなかった。目尻に淡く涙が滲む。
『ドリアの契約の儀式か・・・生贄の心臓を捧げ、兵士たちがその血を浴びるという・・・・・』
「サガ・・・」
澄んだ夕日色の瞳から、次々と透明な涙が滑り落ちる。考えたくなかった。あの二人が、生きながらに胸を裂かれる様など。
「アイオロスたちは助けに行くと言っているけれど・・・儀式が朝に行われるんだったら、絶対に間に合わない。それが悔しくてたまらない！」
『カミュ・・・』
「まだ時間はあるのに・・・待っていることしか出来ないなんて・・・・」
『カミュ・・・泣くのはおよし。』
サガは薄青の衣の袖でカミュの涙を拭ってやった。熱い涙だった。
『カミュ、道は閉ざされた訳ではないよ。君がとうとうこの世界への入口を見付けたように・・・最後まで諦めなければ、二人は助かるかも知れない』
「でも・・・」
『私の言葉が信じられない？』

何をしようとしているのだろう。自分は。
サガはカミュに微笑みかけながら、自問してみた。二人の子供は助からない。これが二人に与えられた、ただ一つの未来なのだ。
人外の者が、人間の運命に手出しをすることは許されなかった。この地上は、人間たちのものだ。正しきも過ちも、全てその責は人間たちが負わなければならないのだ。
それが、神々の世界と人間の世界が分かたれたときからの、最初にして最後の掟。
それを自分は――――――――
「サガ・・・」
カミュがびっくりしたようにサガを見上げる。涙に濡れていた瞳が、驚きと、戸惑いと、幽かな希望の色を宿していく。
「助けて・・くれるんですか？リアやアフロを・・・？」
『・・・さあ。私には風を呼ぶことしか出来ないけれど。』
「あ・・ありがとう！サガ！」
思わず、カミュはサガの首筋にすがっていた。かつて、優しく見守ってくれていた両親にそうしたように。サガはその身軽な身体を抱きとめながら、瞳を閉じた。セレスの制裁が何だというのだろう。この笑顔を守るためなら・・・・・
サガは、もはやカミュの姿に昔の少女の面影を重ねることをしなくなった自分に気付いていた。
カミュは、自分の意志でここまでやってきてくれたのだ。セレスの暗示も、彼自身の中に巣くっていた絶望も。この身を縛る、全ての柵を越えて。
数千年の孤独の中で、たったひとり、その優しい手を差し伸べてくれた少年。
『・・・さあ・・・今日はもうお帰り。この町を出る準備をするんだろう？また皆が心配するよ。』
「うん・・・しばらく会えなくなるけれど・・・・でも風の中にあなたがいるなら――――」
カミュがサガの頬に唇を押しつける。
「また来年、会える時まで我慢する！」
やっと笑った、宝石箱を開いたような、カミュの笑顔。
『そうだね・・・また来年・・・・・・・』

去って行くカミュの後ろ姿を見つめながら、サガはともすれば引き止めてしまいそうな思いを必死で抑えていた。今度こそ本当に、もう会えない。天界の掟を破ったサガを、セレスが許す筈はなかった。自分はこの世界に閉じ込められることになるだろう。もう風に乗って世界を巡ることもできまい。入口は閉ざされ、人々と接触することもかなわなくなるだろう。

それでも、サガは良かった。カミュの心の中に、自分の姿が生き続けてくれているのなら。これからもずっと、一生その面影を抱いていてくれるのなら――――

――愛しているよ・・・カミュ。君を、愛している――

知らぬ間に流れ落ちた涙を指先で拭って、サガは静かに微笑んだ。それは、諦めの中の小さな幸福だった。

Ⅳ　裁きの日

翌日、キールの谷は大嵐に見舞われた。

山から駆け下る豪風は、木々の枝を引きちぎり、崩れ駆けた崖の岩を削り落とし、谷底を流れる早瀬へとたたき落とした。

人々は、不安げに荒れ狂う空を見上げた。昨日までは、あれほど快晴が続いていたのに。

何か、神々の怒りに触れたのではないだろうか。

だが、彼らは知らなかった。キールの谷よりもっと南の地、ドリアの空の下では、今まさに正真正銘の神の鉄槌が下されていたのだ。

「サガ・・・・」

カミュは、頬を叩く風に祈るような思いで呟く。

この風は、サガだ。敵地に進入しようとしているアイオロスたちや、捕らわれている人々を助けるために、ドリア軍を混乱に陥れようとして、サガが呼び起こした嵐なのだ。

どうか、どうか、誰も死にませんように。

あの人たちを、助けて下さい。

谷の誰もが祈っているその願いを、繰り返し、カミュは風に祈った。誰よりも強く、誰もが想像もしなかったこの風の主へ。

自分は、このキールの谷を離れてサマリアに行かなくてはならないけれど――――

「カミュ！何ぼんやりしてるんだ！行くぞ！」

ミロが、列から遅れたカミュに気づいて叫ぶ。カミュは何度も後ろを振り返りながら、走ってミロに追いついた。

「この橋を渡れば・・・取り敢えず安心でしょう」

ムウは静かにそう言った。神官服に身を整えた彼は、手に小さな箱を持っていた。セレス神殿の神体を納めた箱である。谷を占拠したドリア兵が神殿を破壊することを危惧して、かろうじて持ち出せた唯一のものだ。

従う人々も、皆同じような状態だった。誰もが、一番大切なものをたった一つ持ち出すので精一杯だった。シオンの提言を受け入れて谷を捨てる覚悟をした人々に、アフロディーテの母親は涙を零して手を合わせた。

あの子たちは、軍の首脳部に捨てられた。どんなに僅かな望みしかなくとも、自分たちまで、子供たちを捨てるようなことがあってはならない。

そう訴えたシオンの言葉は、長い戦いに疲れ荒みかけていた人々の心に、小さな灯りを灯した。

「渡ったらすぐに橋を焼き払います。サマリアの町にまで戦火を持ち込む訳にはいかない。」

サマリアはキールに隣接する町である。非常時にはこの吊り橋を切って町を守ることになっているのだが、今回はキールの人々を受け入れる為にまだ落とさずに残し

てあるのだ。
「アイオロスたちは・・・？」
「別ルートで逃げることになってる。大丈夫だよ。」
誰かが、小声で呟いた。皆、思いを断ち切れない表情で背後の谷を見つめている。
今度、戻ってこられるのはいつだろうか。
はたして、再びこの谷の大地を踏むことが出来るのだろうか・・・・・
逡巡している暇はない。だが、だれもが、その場所に釘付けになってしまったかのように立ちつくしていた。キールの谷に後ろ髪引かれていたこともある。だが、それ以上に、折からの暴風が軽い吊り橋を木の葉のように揺らしていたからだ。
力のない老人や、軽い子供など、もし間違って手を離せば振り落とされてしまうに違いない。
「・・・せめて、もう少し風が落ち着いてくれれば・・・・」
絶望的な眼差しで橋を見つめている老人。泣き出した赤子を必死であやす母親。
カミュは列の最後尾に立って、じっとそんな様を見つめていた。
その時だった。
「うわっ・・・・・！」
一瞬、空に巨大な雷光が走ったのだ。それから、ほぼ同時に、鼓膜を割かんばかりの雷鳴。
「きゃああっっ!!」
女たちが悲鳴を上げる。カミュも、思わず両耳を押さえて蹲った。そのまま、顔をねじ向けて天を見上げる。
おかしい。
空は確かに曇っているが、あれは雷雲ではない。
では、何が光った?!
「おお・・・！風が・・・・・！」
誰かが、喜びの混じった声を上げた。はっと、カミュは周囲を見渡した。
――風が・・・・・！――――
勢いを失っていくのだ。あんなに、耳の側でうなりを上げていたというのに。
――・・・サガ?!・・・・――――
「今だ！今のうちに、早く渡るんだ！」

人々は、我先にと吊り橋を渡り始める。いずれ、谷に残っていてはドリア兵に虐殺されるだけなのだ。諦めかけていた老人たちも、一歩一歩、足を踏み出し始めた。

――サガ・・・わざと風を止めてくれた・・・？――――

風は答えない。ただ、無音の凪が辺りに満ちているだけ。

違う、とカミュは直感した。この凪には魂がない。サガの思惟が感じ取れない。

――まさか・・・・・・――――

先刻の雷光。あまりにも、不自然だった。たった一度だけ、まるで天の裁きのように、空から振ってきて突き刺さった。

あの人の居る、シルスマリアの森に。

――何かが・・・サガの身に何かがあったんだ！――――

「・・・おい！カミュ、何してるんだよ！」

列から離れて呆然と立っているカミュに気付き、ミロが険しい声を上げた。彼は既に、橋の中頃まで歩みを進めていたのだ。ふとそのまま遠くへ視線を移し、ミロはそのまま両目を見開いた。

丘の向こうに殺到する、黒い人影の塊。

鈍く光を跳ね返しているのは、ドリアの軍旗を掲げた長槍の先ではないのか。

「て・・敵だっ!!」

「何だって?!」

途端に橋の上は、悲鳴と怒号に埋め尽くされた。誰もが、対岸に向かって必死に走る。古くなった渡し木が二、三枚、砕け散って谷底に吸い込まれていく。

ミロは、必死に人並みに逆らって橋の中腹にしがみついていた。カミュがまだ、谷側にいるのだ。

「カミュ！何やってる！早く渡れ！」

カミュは動かない。

「馬鹿！何やってる！死ぬ気か！」

思わず舌打ちして、引き返そうとした。その腕を後ろから、ムウが掴む。

「・・・駄目です！ミロ！間に合わない！」

「ムウ・・・！放せ！」

「カミュ！何をしているのです！早くこちらへ――――」

ムウが、常の彼に似合わぬ声音で叫ぶ。そして、そのま

まその続きをのみ込んだ。

――カミュ?!――

カミュは、微笑ったのだ。しっかりと顔をこちらに向けて、促すように。

「カミュ――――――――!!」

ミロの絶叫が谷にこだまする。カミュはそのまま身を翻して、森の中へと駆け込んで行く。

「もう駄目だっ!!早くこっちへ――――――!!」

先に対岸に渡り、油を用意していたシュラが叫ぶ。

「橋を焼き払います!」

ムウの腕を振り切ろうと抗うミロが対岸に引き揚げられるのと同時に、橋に火が放たれた。轟音と共に、二つの岸を繋ぐ唯一の道が焼け落ちてゆく。

ミロは、呆然とその場に座り込んで、燃え盛る炎を見つめていた。

サガは、未だ自由の利かない身体を湖のほとりに横たえていた。セレスの投げた雷が、サガの身体を貫いたのだ。もっとも、とうに肉体は失われていたので、雷は暫くの間サガの魂の自由を奪ったに過ぎなかったが。

――そしてこれから本当に自由を奪われるという訳か。

――――

サガは、自嘲めいた笑みを口の端に浮かべた。どうせなら、狭い牢獄にでも閉じこめてくれればいい。叶うなら、この魂を消滅させてくれれば言うことはない。

この果てのない世界に一人で生きることこそ、何よりも辛い責め苦に違いないから。

こんな時間を、あとどれだけ耐えてゆけばよいのか・・・・・・

――・・・・?・・・・――――

不意に、弱々しく枯れ枝を踏みしだく音を聞いて、サ

ガは無理矢理音の方に顔をねじ向けた。全身が痺れて、首一つ動かすのもままならない。やっとのことで首だけ向き直ると、ほんの少しだけ、足音が近くなった。

谷を侵略したドリア兵が、迷い込んできたのか。

足音は、軽く片脚を引きずっていた。負傷兵であれば、おそらく森から生きて出ることは出来まい。それほどに、このシルスマリアの森は深いのだ。だが、サガはただ足音の方に視線を投げているだけであった。

何が出来る？こんな自分に。

自分の身を動かすことすら、ままならないのに――――

ドリアの兵士を憎んでいる訳ではなかった。本当に、彼にはもう、人の世界と関わる術がなくなってしまったのだ。

目眩がする・・・・

瞳を閉じる。瞼の裏に、あどけない笑顔が映る。辛くなって、無理矢理目を開けた。じっと目をこらすと、遠くに人影がかすんで見えた。

あれは・・・・・・

とうに失ったはずの心臓が、びくりと跳ねる。

視界に飛び込んできたのは、夕日色の小さな少年。

――そんなはずはない・・・！――――

あの子は、サマリアへ疎開することになっていたはずだ。

こんなところに、やってくるはずがない・・・・!!

少年は、泉を見渡せる位置までやってくると、一瞬びくりとしたように足を止めた。小さな口が、何事かを呟く。それから、引きずった足を庇いもせずに、一息に水際まで駆けつけた。

「・・・サガ!!」

目に眩しいほどの深紅の色彩が、サガの前に膝をつく。

「やっぱり・・・・!あの雷のせいで・・・・!」

『・・・カミュ・・・？』

サガは、幻を見ているかのような思いで、その全身を見渡した。傷だらけの、細い手足。ところどころ裂けて血に染まった衣服。だがそれらは、何よりも生きている者の証だった。

幻などではありえない。この、生きているものなど何一つない空間で、たったひとつの命。

『どういうことだ・・・カミュ、その傷は・・・・・・』
「サマリアに行く筈だったんだけど、戻ってきたんだ。さっき急に風が止んだでしょう？きっとあなたに何かあったんだと思って・・・・」
『・・・・カミュ・・・・・』
震える手が、サガの意識の外で、すがるように伸ばされた。愛おしくて、たまらなかった。こんな罪人のために、何故彼は戻ってきてくれたのだろう。
命懸けで。
――何も、要らない・・・・――――――
この命がこの手の中に在ってくれるのなら。
初めて、魂の底から欲した。風の精霊として力も、この閉じられた世界の中の小さな自由も、全て失ってしまってかまわないから。どうぞ、彼をこの手に。
永遠に乾き続ける魂を癒す、優しい心――――――
だが、それゆえにこそ、突き放さねばならないのだ。
――カミュ・・・・――――――
サガは固く目を閉じて、きつく唇を噛んだ。じきにこの世界は閉ざされる。入ることも、出ることもかなわなくなってしまう。
カミュを死なせたくはなかった。
だから、冷たく告げた。ことさら、表情を消した声で。
『・・・何をしに来た？カミュ』
「・・・サガ・・・？」
見開かれた瞳が、びくりと震えたように揺れる。
『帰りなさい。ここはもうおまえの来る所ではない』
「でも・・・・！」
『言ったはずだ。ここの結界はそう簡単に越えてはならない。お前は来年まで我慢すると言ったのではなかったのか？』
はっと、少年が胸を掴まれたように息を飲んだ。確かに、彼は約束したのだ。大神セレスの怒りに触れてこれ以上の罰を下されないように、来年の復活祭まで我慢する、と。
――だけど・・・・！――――――
では、何なのだろう。この、得体の知れない不安・・・・
『帰れ、カミュ。』
もう一度、サガは告げた。自らの心が、悲鳴を上げる

のを聞きながら。
カミュは、じっと黙ってうつむいていた。サガの言葉は正しいのだ。自分がわがままを言えば、罰はきっと彼に下される。これ以上、サガの自由を奪いたくはなかった。
それでも。
どうしようもない嵐が、この胸の中にあったのだ。
このひとを、一人にしておきたくない。
初めて出会ったときから、囚われてしまった。その微笑みの中に隠された、胸を切り裂くような孤独に。
「・・・帰れって、何処に？」
次に口をついたのは、彼の中でようやく形をなした、揺るぎない決意の破片。
「僕には両親も兄弟もいない。・・・キールの町も、ドリアに占領された」
『・・・・・・』
「だから・・・ここへ帰ってきたんだ。」
真紅の双眸が、まっすぐにサガを見つめている。
『・・・カミュ・・・・』
サガは目を閉じた。かなわない。分かっていたのだ。初めから、カミュにかなう筈もないことなど。
だから罪を重ねた。その咎も、一人で負うつもりだったのに。
冷たく作っていた口調を解いて、サガは大きく溜息をついた。
『カミュ・・・駄目なのだ。ここはじきに閉ざされる・・・君の世界への接点がなくなってしまうのだ。』
「何故・・・?!」
『罰だよ、カミュ。人間界の争い事に手を貸したのだからね。我々は何があろうと、人間のすることに手を出してはならないことになっている』
「そんな・・・・・・！」
カミュの白い顔から、はっきりとわかるほど血の気が退いた。・・・では、自分のせいなのか。サガが、永遠にこの世界に閉じこめられてしまうのは、自分が無理な願いを願ったからなのか。
「・・・どうして・・・・どうして言ってくれなかったんですか・・・・そのこと――――！」

思わず詰め寄った少年に、サガは淡い笑みを向ける。言っていれば、君は願わなかったのか、と。

「それは――――」

カミュは、愕然として身を引いた。・・・聞いていれば、願わなかっただろうか。アイオリアとアフロディーテが死ぬのはどうしようもない運命なのだと、諦めただろうか・・・・？

わからない。

何を選べばよいのか。

自分は、どうすれば良かったのか――――

『・・・そう・・・その表情。』

ふと、サガが微笑んだ。まるで、愛し子を見つめるように。

『そんな表情を、させたくなかった・・・・・・』

「サガ・・・・・・」

『だから、これで良かったのだよ。』

悲壮なまなざしで自分を見つめている少年の髪を漉いて、頬を優しく撫でてやる。

自分が切り捨てられることを、畏れたわけではなかった。むしろ、切り捨ててくれるのなら、それでもよかったのだ。

・・・自惚れかも知れない。それでも。

本当は、カミュが自分を選ぶことが怖かったのだ。友人を見捨てて、自分を選んで――――一生、死ぬまで罪悪感に捕らわれ続ける姿を見るのが怖かった。

『・・・君は悪くない。けれど、その罰は君も受けなければならないのだ。私たちは二度と会えない。・・・それが君と私に与えられた罰なのだ。』

「・・・サガ・・・・・」

カミュはしばらく、打ちのめされたように俯いたままだった。何故、こんな結末になってしまったのか。本当に、こうなるしかなかったのだろうか。

――あなたを独りにしたくない・・・・・・――――

その思いは、初めて出会ったときから変わらないのに。

ゆっくりと、カミュの中で、ある決意が宿っていった。たとえ全てが断罪へと向かってしまっていても、たったひとつ、自分に出来ることはあるはずだった。ひとつの寂しい魂を、永遠の孤独に追いやる前に。

たとえ、全ての神々から忘れられ、罪人の烙印を押されても。
自分だけは、愛し続ける。世界が終わるその日まで、ずっと。
「嫌だ。」
『カミュ！』
「もとの世界には帰らない。僕はずっとここにいる！」
『聞き分けのない・・・・！』
サガが焦燥を込めて告げる。
『ここは何もない所なのだよ?!生きているものは何一つない。君が口に出来るようなものは何も・・・！人間には暮らせない。生きてゆけないのだ』
「・・・分かってるよ、サガ。」
カミュは笑った。まるで、何でもないことのように。
「そんなこと、分かってる。」
――カミュ・・・　?!――――
一瞬、呆然としたサガの顔から、血の気が引いていく。
――カミュ・・・何をする気だ・・・?――――
「・・・サガ、僕は湖の精霊になりたいんだ。似合うと思う?」
カミュは、ことさら明るい口調で告げる。己の中の恐怖に、気付かないように。
『・・・カミュ・・・！』
「湖は好きだよ。冷たくて、澄んでて。赤い髪には似合わないかな・・・・」
『何をする気だ！』
サガは動かない腕を必死で伸ばした。カミュを行かせてはならない。行かせてしまったら・・・・！
しかしカミュはいとも簡単にその腕をすり抜けた。湖に向って走り、その水際で立ち止まる。二、三度、大きく息をつき、ゆっくりと振り返った。遠目にも分かるほど、はっきりと震えていた。
「少しだけ・・待っててね・・・。あなたと同じだけの罪人にならないと、精霊にはなれないんでしょう?僕は神様じゃないけど・・・きっと水の精霊になるから。だから・・・・・」
『カミュ！行くな！』
「ほんの少しだけ・・・待っててね・・・・」

言葉が、辺りの風景にとけ込むように、消えていく。

カミュは、泣いていた。泣きながら、震えていた。くるりと踵を返し、湖に分け入って行く。振り返ることもなく、自分を呼び止める声に怯えるように。

滄い水が、紅の少年をのみ込んで行く。必死に伸ばした指の先で、たった一つの命が水面に融ける。

『カミュ・・行くな・・・カミュ!』

風が、止まる。

サガの視界が、水のスクリーンを張ったようにぼやけ、それからゆっくりと白い光に埋めつくされていった。

V　風が唄う伝説

戦争が終わって、五年が過ぎた。
ミロは五年ぶりに訪れる故郷の町キールを、複雑な面持ちで見つめていた。あの総攻撃の日から、誰もカミュの姿を見ていない。遺体は見つからなかったが、誰もがドリア兵に殺されたと思っていた。アフロディーテは、自分の代わりにカミュが死んだのだと泣いた。
キールは、戦後初めて復活したセレス復活祭で賑っていた。町の賑いに背を向け、ミロは森へと踏み込む。今はまだ、騒ぐ気にはなれなかった。
――森は、カミュが好きな場所だったな――――

足元に咲くエニシダの花に気付き、その小さな花弁を手にとってみる。薬草に詳しいカミュは、いつも森で草を集めていた。緑の中に佇む、赤い色彩。正反対に見える二つの色彩は、不思議と自然の中では良く調和していた。花のようだと、ミロはよく思ったものだった。
「・・・・?・・・・」
ふと、ミロは微かな水音に気付いた。この辺りに泉はなかった筈だ。
――何処だ・・・・?――――
音のする方向に、足を向ける。大樹に覆われたシルスマリアの森は、昼間でもしっとりと湿った大気に包まれている。
歩いても歩いても、水音は近づかなかった。
何処か、別世界から聞こえているような涼やかな音――
――・・・これは・・・?!――――
不意に、ミロは立ち止まって耳をそばだてた。水の音に混じって、竪琴の音が聞こえるのだ。忘れもしない。かつて、一番大切だった人が、寂しげに奏でていた旋律。

――カミュ?!――――

激しい動悸が、胸を襲った。谷の少女たちによって受け継がれ、今はすっかり有名になってしまった『青の旋律』だった。それでも。

――後ろ・・・?――――

竪琴の音に誘われるままに、後ろを振り向く。その先の光景など予想もせず――――

「な・・・・!」

あろうことか。今歩いてきた場所に、広大な湖が広がっているのだ。

「どういうことだ・・・?」

混乱した頭に、またあの旋律が被さってきた。今度は、もっとはっきりと。

『サガ!』

森の奥から澄んだ子供の声が聞こえる。軽い足取りで駆けてくる足音と共に、その声は近づいてきた。それから、ぽっかりと開けた岸辺の陽光の元に駆け出してきた、見事な赤毛の少年。

――あれは・・・・!――――

ミロの双眸が、限界まで見開かれる。

『カミュ、転ばないように!』

木陰から、長い銀の髪の青年が姿を現す。手には、金色の竪琴を持っている。

「・・・・・カミュ!」

思わず駆け出そうとして、ミロは目の前を阻む透明な壁に気付いた。前に進めない。

この壁の先は、この世ならぬ世界なのか。

「カミュ・・・・!」

ミロは、声を限りに叫んだ。間違いない。あれは、カミュだ。あの総攻撃の日、最後に見た姿のままの・・・・・!

「カミュ!俺だ!こっちを向けよ・・・・・!」

声は、確かに届いたらしかった。カミュが、そして銀の髪の青年がミロの方を振り向く。それから、まるで仲の良い兄弟のように楽しそうに笑った。

「カミュ・・・・お前・・・・・・」

『ミロ・・・大きくなったね。』

「やっぱり・・・・・・」

『泣かないで、ミロ。』

カミュの透明な声が、ミロにふんわりと降りかかってくる。
「こんな・・・・・・・」

これで、良かったのだろうか。
こんなに、幸せそうな表情をして。
永遠に引き離されるくらいなら、生きる世界を変えた方が、よかったのだろうか――――
『有り難う、ミロ。ずっと僕のことを気にかけていてくれて。』
「幸せ・・・なんだな――――」
聞かなくても、わかる。こんな笑顔を浮かべるカミュを、見たことない。
『ここには、サガがいるから――――』
カミュが微笑む。かつてミロが見た、どんな微笑みよりも幸せそうに。
ミロは、涙に濡れた顔を上げてカミュを見た。
カミュと、カミュを守るように立っている青年の幸福そうな笑顔を。
『だから、約束して欲しい。ミロも必ず、幸せになるって・・・・』
幸せに・・・・・・

ざあっ、と風が吹く。
一瞬にして、幻影は消えた。夢の片鱗も残さず。
「幸せに・・・・なるよ。」
ミロは瞳を閉じて呟いた。いつでも、どんな時でも、あの二人の幻影を思い出せるよう心に刻みつけながら。
森は、いつもの姿に戻っていた。ミロは涙を拭うと、しっかりとした足取りでもと来た道を戻り始めた。
婚約者の待つ、故郷キールの町に向かって。

題名　「風が唄う伝説」
著者　祥曲　星祈　(sforzato)
初出　「Carmina Brana II」に連載

この作品の二次配布は、以下の条件を満たす場合に限り自由ですが、著作権は放棄しておりません。
１）改変、抜き出し等いかなる形の変更も行わないこと
２）著者名及び下記サイト URL を明記すること
３）無償であること
引用等については下記サイトからお問い合わせ下さい。

サイト URL
http://moo-and-mole.com/waltz/